

書をもって農村へ行こう

——サスカチュワンから高島まで私の旅——

松原豊彦

はじめに

1. 学部から大学院へ
2. 修士論文でカナダ農業をテーマにする
3. 宮城学院女子大学へ赴任、初めてカナダ・サスカチュワン州へ行く
4. 立命館大学に移る、マニトバ大学で学外研究
5. UBC ジョイントプログラムとバンクーバー
6. 高島町屋代村塾と出会う
7. 6次産業化研究に取り組む

結びに代えて

はじめに

表題については、堀口健治・加藤基樹編『書を持って農村へ行こう—早稲田発・農山村体験実習のすすめ—』（2011年、早稲田大学出版部）から拝借した。この書名は寺山修司「書を捨てよ、町へ出よう」をふまえたものであろう。ただし副題は自分でつけた。堀口先生は高島町屋代村塾の第2代塾長であり、村塾を紹介していただいた。そうした縁もあって、同書第3章「共生の思想から農的生活の体験へ：有機農法の里＝山形県高島」に、「小集団教育と体験実習型学習—立命館大学松原ゼミ」を執筆した。因縁浅からぬ同書の表題を借用したことを初めにことわっておく。

農業経済学を専攻し、農業問題・食料問題の教育研究に従事してきたが、うちは農家ではない。大阪府布施市（現在の東大阪市）で生まれ育った。母親の実家は花園ラグビー場の近くの旧英田村の農家である。田植えや稲刈りの時期に実家の兄弟姉妹が集まって作業をしている間、圃場で遊んでいた記憶がある。これが農業との最初の出会いだろうか。

1955年（昭和30年）12月生まれで、この年は日本の高度経済成長の出発点にあたる。また、この年はコメの大豊作で1200万トンの収穫があった。それで戦後初めてコメの国内自給ができる見通しがたった。戦後の農地改革と技術改良の成果がコメの大豊作に結実した。豊作の年の暮れに生まれたのが、名前の由来であると聞いている。今のよう豊作だと米が余ってどうしよう、などと余計な心配をしないで、素直に喜ぶことができたある意味で良い時代である。

1. 学部から大学院へ

大阪市立大学経済学部で梅川勉先生のゼミに所属した。そこで初めて農業経済学の手ほどきを受けた。梅川ゼミは先生の研究室で、最初の30分ぐらいは調査に行った話があった。「この前はあそこに調査に行った」「温室で鉢植えを育てて、喫茶店にレンタルしている農業もある、結構もうかる」「大阪湾でも意外と魚がとれる」などの話があったから、おもむろにゼミ生の報告になる。学生教育を兼ねて調査の話がされたと思うが、当時はあまりまじめに聞いていなかった。調査の話聞くことのありがたみがわかったのは、後年になってからのことである。

大学院は京都大学経済学研究科に進学し、中野一新先生の研究室に所属した。中野先生は40歳の手前で、経済学部で一番若い助教授だった。ここでマルクス「剰余価値学説史」「ルイ・ボナパルトのブリュメール18日」（フラン

ス三部作の一つで分割地農民の話がでてくる)などの古典を読んだ。日本農業に関しては、山田勝次郎「米と繭の経済構造」、栗原百寿「日本農業の基礎構造」、小倉武一「農地立法の史的考察」、井上晴丸「日本資本主義の発展と農業及び農政」などを読んだことが勉強になった。

2. 修士論文でカナダ農業をテーマにする

修士論文のテーマは、カナダの農業構造と農民層分解にした。中野先生はアメリカ農業を研究し、当時東大経済学部の大内力氏との間でアメリカ農業と農民層分解について論争をしていた。

学部の卒業論文は戦後日本の農民層分解論のレビューをテーマに書いた。それで19世紀末ドイツの「小農論争」(小農家族経営の存続可能性をめぐるカウツキーとダビッドの論争)をテーマにしたいと中野先生に相談したら、このテーマは新しい資料を発掘しないと論文にまとめるのはむずかしいと言われた。

中野先生からは、「カナダの農業を調べたらどうか」「カナダでは1970年に小麦の生産調整を行ったが、その影響はどうなっているか」「農民層分解といっても国際的な視点で考える必要がある」とアドバイスされた。これがカナダ農業の研究に取り組むきっかけだった。

カナダはアメリカに次ぐ穀物輸出国であり、わが国の輸入農産物の多くを北米からの輸入に依存している。穀物輸出側の農業生産や農業経営の構造はどうなっているのかを明らかにすること、カナダはアメリカの51番目の州と言われたりしたが、両者は同じとみてよいのか、違いがあるとすればそれは何であるか、などが問題意識だった。

1973年から74年にかけて国際穀物市場の需給ひっ迫からシカゴ商品取引所での価格高騰があり、アメリカ政府は国内物価の安定化を優先して大豆禁輸に踏み切ったので、穀物輸入に依存する日本への影響は大きかった。大学受験の直前で、この時豆腐や厚揚げの値段が瞬く間に上がった(同じ値段であれば小さくなった)。飼料価格の高騰で畜産農家への打撃は大きかった。こうした経験があり、穀物輸出国側の事情を調べることは、わが国の食料供給にとって意義があると考えた。

さて、カナダ農業に取り組むことになったが、いざ研究をするとなると課題が続出した。当時カナダ研究に取り組む人は少なく、カナダ農業について日本語での先行研究はほとんどないに等しかった。農業総合研究所(今の農林水産政策研究所)の石関良司氏がカナダ農業について論文を書いていたので、当時西ヶ原の総研に話を聞きに行った。英語の論文や資料を手に入るかぎり集めて読むことにした。

難しかったのは、資料やデータの入手だった。当時はかなり恵まれた人でないと海外に渡航して調査することは考えられなかった。そこで、文献と統計資料を手掛かりに修士論文に取り組んだ。国立国会図書館にカナダの農業センサスが入っていたので、何度も通ってコピーをとった。一度も現地をみないで、カナダ農業について書いた。カナダに初めて渡航したのは大学教員になってからの1986年である。

中野先生の論文指導は綿密でかつ厳しかった。修士論文の第1稿は真っ赤になるまで直しが入り、原文は跡形をとどめない状態になった。君の文章はぶっきらぼうだ、もっと日本語の表現を学びなさい、と言われた。このときの経験は、大学教員になって卒論や修論の指導をするとき役にたった。とはいえ、中野先生の指導の足元にも及ばないと思う。

大学院生としてもう一つ重要な経験をした。当時中野研究室の院生は代々京都府農業会議の調査員をしていた。調査員としての私の仕事は、農業後継者問題をテーマに文献資料の整理や農村調査に参加して、年度末に報告書をまとめることだった。農業会議の職員と一緒に、久美浜町、伊根町、加悦町、夜久野町、美山町など京都府下の農村を廻って、農業後継者や自治体の職員から話を聞き、資料を集めた。京都府は南北に長く、南部と北部では農業構造に大きな違いがある。南北の分水嶺は観音峠であり、ここを境に淀川水系と由良川水系に分かれることを知った。

農業会議ではテーマごとにチームを作り、大学教員と職員、われわれのような院生が研究会をしていた。私たちのチームには、京都大学の稲本志朗先生、滋賀大学の美崎皓先生、成瀬龍夫先生などの大家がおられ、研究会で話を聞くことができた。農業会議の調査員として府下農村の現場を見て歩いたこと、大学や学部を超えて先生方と勉強ができたことはその後のキャリアにとって大きな糧となった。



3. 宮城学院女子大学へ赴任、初めてカナダ・サスカチュワン州へ行く

1983年4月に仙台の宮城学院女子大学に、家庭経済学、食料経済担当の専任講師として赴任した。家政学科の管理栄養士養成課程に所属していたので、食料経済は必修科目だった。仙台には家族（妻と2人の子）と赴任した（関西に戻るとき子どもは3人に増えた）。6年間の仙台での暮らしは楽しかった。スキーを覚えたのはこの時期で、大学がスキー教室（合宿）を2月に蔵王で行っていたので、教職員の希望者はそれに参加していた。蔵王のスキー教室に毎年行き、樹氷原コースを滑走した。

大学での授業や業務のかたわら、東北大学農学研究所の河相一成先生の大学院ゼミに参加した。河相先生の研究室では県北部小牛田町の農村調査（農林省の構造改善基礎調査）に参加した。高齢者からの聞き取りは言葉がわからないところが多く苦勞した。東北学院大学の仁昌寺正一さんたちと宮城自治研究所で地域経済の研究会を行い、山村の七ヶ宿町や鶯沢町に学生を連れて合宿に行った。

1986年8月にカナダに渡航し、現地の農業を見て農家の話を聞くことができた。前年の1985年9月から急激な円高が進んだことで海外に行きやすくなった。この時は2週間の行程で、バンクーバーで一泊してから、サスカチュワン州に移動し、サスカトゥーン、リジャイナへ行き、さらにマニトバ州ウィニペグへ行った。

サスカチュワン州、マニトバ州はカナダの穀物主産地であり、広大な平原に小麦畑が地平線の向こうまで続くのを初めて見た。サスカトゥーンにはサスカチュワン大学（農学部が有名）があり、ここの日本料理店で働いているカナダ人学生の親が農家というので連れていってもらった。サスカトゥーンから北へ約1時間30分、リースクという小さな町で農場を見学した。時は8月末で小麦の刈り取りの最中だった。この時期の農家は猛烈に忙しく、夕食を畑でとり、夜中の12時まで照明を煌々とつけてコンバインを動かし収穫に励んでいた。

4. 立命館大学に移る、マニトバ大学で学外研究

1989年に立命館大学経済学部に移り、農業経済学を担当した。1993年に学外研究員として、4月から9月までマニトバ大学に行った。カナダに長期滞在したのは初めてだった。マニトバ大学では Transport Institute（運輸研究所）に部屋をもらって研究した。ここでは農学部のノーマン・ビートン先生にお世話になった。着いた翌日、州の農業博覧会に行こうと誘われ、先生の車で会場のブランドンまで片道2時間の道のりを日帰りして往復した。

マニトバ大学があるウィニペグはカナダ平原州を主産地とする穀物・油糧種子の集散地で、政府機関や穀物商社が集中している。この機会にと、カナダ小麦局や穀物委員会、穀物商社のカーギル（カナダ）、パイオニア・グレインなどを訪問して資料集めに精をだした。

1989年に米加自由貿易協定が発効した。それまでアメリカ・カナダ間の穀物貿易はほとんどなかったが、自由貿易協定を機に穀物や油糧種子の貿易が拡大していた。穀物の輸出はカナダ小麦局が国家貿易機関として独占していたが、アルバータ州の大麦生産者協会などがアメリカ向け輸出をCWBの独占から外して自由化せよという要求をしていた。この問題をめぐって研究者も含めて激しい論争が交わされていた。マニトバ大学にいたのはこういう時期であった。

話は戻るが、1985年に中野先生がアメリカに10か月間在外研究に行った。帰ってから現代アメリカの農業に決定的影響を及ぼしているアグリビジネスの研究に取り組むことを、中野研究室出身者で作る研究会のメンバーに提案した。アグリビジネスとは農業関連産業（企業）のことで、農業資材産業から農業生産、農産物の加工、流通、外食まで広い範囲に及ぶ産業とその相互連関をさしている。農業生産や経営に大きな影響を及ぼしているのが、これらのアグリビジネスであり、農業政策や国際貿易にも大きな影響力をもっている。とりわけ、その頂点に立つ多国籍アグリビジネスによる農業支配の構造を明らかにすることが中野先生の提案だった。ここから、アグリビジネスに関する著作の翻訳が始まり、パーバック＝フリン『アグリビジネス—アメリカの食糧戦略と多国籍企業—』（大月書店、1987年）などの集团的翻訳に参加した（あとでブルースター・ニーン『カーギル—アグリビジネスの世界戦略—』のところでふれる）。

米加自由貿易協定のもとで穀物・油糧種子の物流や貿易が変わりつつあった。カーギルや ADM など多国籍アグリビジネス企業のカナダ進出がさかんになっていた。こうした事態をどうみるかについて問題意識をもつようになり、のちの単著『カナダ農業とアグリビジネス』（1996年）のもとになる論文を書いた。

この頃には運転免許を取っていたので、レンタカーでカナダ平原州の農場を見て歩くことにした。また学会などの機会に、カナダ東部のケベック州、オンタリオ州から東端のニューファンドランドまで足を延ばしたりした。西ではエドモントンのアルバータ大学の学会に車で行ったりしてかなりの長距離を走った。

九州大学の磯田宏さんがイリノイ大学に留学していたので、空路イリノイ州アバーナ・シャンペーンへ行き、磯田さんの車でセントルイス（ミシシッピ川中流域の穀物集散地）へ向かった。ところが、ドライブの途中で車の調子が悪くなり、セントルイスには何とかどおりついて修理工場に駆け込んだ。アメ車は信頼できない、すぐ故障するなど散々悪口を言ったことがたたったのかもしれない。

セントルイスでは CGB 社（全農が買収した穀物商社）のヒアリングをして、そのあと単身ルイジアナ州ニューオーリンズへ行った。ルイジアナでは全農の輸出用ポートエレベーターを見学した。全農がなぜアメリカの商社を買収と思われるかもしれないが、全農は日本の畜産農家に飼料を販売しており、その原料であるトウモロコシや大豆をアメリカで買い付けている。

食べものについて余談をひとつ。このとき初めて crawfish（ザリガニ）を食べた。ルイジアナではザリガニを食用に養殖している。真っ赤にうでたザリガニが大皿いっぱいに出てきてどうしようかと思ったが、香辛料で味がついておりビールに意外と合うことを知った。ルイジアナの料理は肉やジャガイモが多い中西部や平原州の食べ物と違い、魚介類が豊富だった。ニューオーリンズのフレンチクォーターでは、オイスターバーで生ガキを堪能した。同州では catfish（ナマズ）を養殖しており、これは淡白な白身でおいしかった。

5. UBC ジョイントプログラムとバンクーバー

1996年8月から立命館 UBC ジョイントプログラムの担当教員としてブリティッシュ・コロンビア大学（UBC）に行った（97年4月まで）。ジョイントプログラムの6年目で100名の学生を教員2名、職員1名で引率し、UBCで授業も担当した。英語の授業をするのは初めてで、準備が大変だった。当時パワーポイントはなく、ワープロで作ったものをスライドにコピーして使っていた。地理学科のデービッド・エディントン先生が相方で、「アジア太平洋地域研究」の講義をした。私の分担は日本の経済・産業や経済政策だった。

バンクーバーにいたとき、日本から農業経済研究者・自治体農政担当者の北米農業調査団が来たので、これに加わってアメリカ・ワシントン州の各地を回って調査した（九州大学の村田武先生が団長）。ワシントン州立大学のレイモンド・ジュソーム先生（農村社会学）がホストで、ヤキマバレーのリンゴ産地やワシントン州産和牛（！）の繁殖・肥育農家などを見て回った。

BC州では内陸部オカナガンバレーのリンゴ、ブドウ産地やワイナリーを調査した。平原州の農業とはまた違って、果実やワインの産地、バンクーバー周辺の都市近郊農業地帯を見て、カナダ農業の多彩な側面を知った。このときの経験は科研費で「米加自由貿易協定と果実産業・ワイン産業」をテーマにしたときに役立った。

UBCに行く前の1996年に単著（カナダ農業とアグリビジネス、法律文化社）を刊行して、京大に学位申請を提出し1997年1月に授与された。このとき、Brewster Kneen, *Insivible Giant* の翻訳作業が進行していた。中野先生の監訳であり、綿密かつ長時間の照合作業になった。一時帰国の機会にということで、京大の研究室に行き3日間続けて深夜に及ぶ照合・検討作業で疲労困憊した。この翻訳はブルースター・ニーン『カーギルアグリビジネスの世界戦略一』（大月書店、1997年）として刊行した。

2004年4月から2005年3月まで再び学外研究の機会を与えられた。このときは、2004年8月からバンクーバーに行き、翌年3月まで滞在して、カナダ各地を調査した。とくに大きかったのは、サスカチュワン州の大規模な穀作農家の動向を調べたことだった。サスカチュワン大学のロスワッセン教授の紹介で、同州の農家を廻って調査した。この時は穀物価格が低落しており、大規模農業経営といえども非常に苦しかった。小麦離れが進行し、その一方でナタ



ネ（キャノーラ）の生産が大きく増えるとともに、畜産経営への経営多角化や飼料作物の生産拡大が進行していた。

次にオンタリオ州の南端（米国ミシガン州デトロイトの近く）にあるリミントンの施設園芸地帯で調査を行った。ここはケチャップメーカーのハインツの主力工場があり、加工用トマトの一大産地である。同地の野菜農家トム・クラモト氏から紹介された施設園芸経営を調査した。メキシコやカリブ海地域からの多数の出稼ぎ労働者が働き、巨大温室で生産したトマト、キュウリ、ピーマンをアメリカ向けに輸出していた。土を使わずに培地で溶液栽培する自動化生産システムで、オランダのメーカーが開発していた。これを「農業の工業化」として位置づけたが、今でいうスマート農業のはしりだった。とはいえ「農業の工業化」を支えているのは、メキシコ・カリブ海地域からの大勢の出稼ぎ労働者であることを知った。

これらの調査をもとに、磯田宏・佐藤加寿子氏との共著『新大陸資本主義国の共生農業システム—アメリカとカナダ』（共生農業システム叢書第9巻、農林統計協会、2011年）を書いた。本来であれば、その続編を出さないといけないが、その後は大学の業務が忙しくなり、なかなか果たせずにいる。

6. 高畠町屋代村塾と出会う

ここで日本の農業・農村に眼を転ずることにする。山形県の高畠町屋代村塾との出会いは、早稲田大学の堀口健治先生の紹介による。屋代村塾は同じ早稲田の大塚勝夫先生が「都市と農村の共生」のために、出身地高畠町の農家によびかけて立ち上げた。そして私財を投じて、実家の敷地に学生と農家が交流するための合宿所を建てた（1996年）。ところが、大塚先生は病気で亡くなり、堀口先生が村塾塾長を引き継いでいた。

当時、経済学部はびわこ草津キャンパス（BKC）に移転して、経営学部・理工学部と共同で「文理総合インスティテュート」という新しい教育組織を立ち上げていた。私はそのなかの環境・デザインインスティテュートの専任教員として、経済・経営・理工の3つの学部の学生からなるゼミを担当した。環境・デザインインスには問題意識のある「とがった学生」が多く、ゼミ生には農業や農村の現場で学びたいとの思いが強かった。

高畠町は日本有機農業研究会の発祥の地で、有機農業に熱心な農家が多いと聞いていた。2000年にゼミ生と高畠町へ行き、農民詩人・作家で著名な星寛治氏宅を訪問して話を聞いた。このときの高畠町と星寛治氏訪問は、ゼミ生の糸昌見さんの発案で実現した。糸さんは社会人学生でゼミを引っ張っており、卒業研究は栗東市の平飼養鶏農家の自然派農業と農業への思いを1年間取材してまとめた映像作品だった。

堀口先生の紹介で屋代村塾を訪問したのは2001年だった。この年から夏のゼミ合宿は屋代村塾に定着した。3泊4日の日程で、1日目は移動と湯沼温泉へ行ったあと、村塾でのオリエンテーション、買い出し、2日目朝から受け入れ農家へ行き、農作業と農家に宿泊、3日目夕方まで作業をして、夜は村塾で交流会、4日目は村塾の片づけとノート記入、高畠ワイナリーによってから帰る、という定番コースである。ここでのポイントは、受け入れ農家の一員として仕事と生活をともにすることである。農業体験といわずに「農家体験合宿」というのもそこから来ている。12月には屋代村塾の塾生メンバーがBKCに来て、留学生の国際交流イベントで餅つきをして、つきたての餅や玉コンニャクを参加者にふるまった（糯米は村塾メンバーが作った特別栽培米）。これは早稲田と立命館で続いている取り組みであるが、2020年は新型コロナ・ウィルスの感染拡大防止のため、夏の合宿、餅つきともに中止のやむなきに至った。

屋代村塾の合宿がかくも長く続いてきたのは、次の要素が大きかった。第一に、農家体験合宿で学生は多くのことを学び、成長する実感をもったことである。第二に、受け入れ側の組織がしっかりしていることである。これは屋代村塾のコアメンバーとの信頼関係がカギであった。第三に、受け入れ農家は農業経営についても、農業観についても多様である。村塾の方針は多様性を受け入れることであり、それを学生と共有してきた。例えば有機農業に対する考え方や今の農政についての考え方は農家によって多様である。入試問題の解答であれば一つに決めないといけないが、ここでは一つに決めないこと、正解はいくつもあることを大事にしている。

7. 6次産業化研究に取り組む

2010年ごろから「農業・農村の第6次産業化」をテーマに取り組んだ。6次産業化は、第1次産業である農林漁業が原料供給にとどまらず、加工（第2次産業）や流通・外食サービス（第3次産業）などに進出し、付加価値を農業サイドに少しでも取り戻すことである。「 $1 \times 2 \times 3 = 6$ 」から、東大の今村奈良臣教授が6次産業化を提言した。当時は6次産業化・地産地消法が成立し、農水省が目玉事業として推進しようとしていた。

この背景から、農水省は2010年度の2次補正予算で6次産業化人材育成事業を全国で展開することになった。私のところに、近畿地区における講座の企画運営の依頼がきた。堀口先生が全国事業の統括者であり、これが6次産業化に取り組んだ始まりである。そのときに事務局で説明と打ち合わせに来たのが川辺亮氏（農都共生総合研究所代表）である。近畿地区の講座は時間がないなかでスタートしたが、熱心な参加者が多く、事務局の助けもあり無事修了まで漕ぎつけることができた。この時2011年3月に東日本大震災と原発事故が起これ、東北地区の講座は途中で中止になった。

立命館大学ではグローバルイノベーション研究機構（R-GIRO）の研究拠点「農水産業の第6次産業化」が採択され、BKCで農業・食料に関心をもつ教員が学部を超えて研究拠点を作った。2012年から17年までその代表として活動を続けた。当時、経営学部移転後のBKCに新学部を作る構想が検討され、そのなかで「食の学部」が有力な案に浮上していた。そういう背景もあって、6次産業化の研究拠点には追い風が吹いていた。

この時期に草津市の調査や三重県志摩市のキンコ芋の調査を行った。研究拠点では若手研究者育成のため専門研究員（ポストドク）を採用しており、中野謙氏、次には楠奥繁則氏がポストドクとして6次産業化の調査に取り組んだ。草津市との関係では、2011年から市のシンクタンク草津未来研究所の所長を引き受けており、未来研究所の調査研究事業として6次産業化の基礎調査を行った。このときに草津ブランドの検討を提言したことが、のちの草津ブランド推進協議会につながったと思う。同じ頃に、守山市では食のまちづくり協議会を立ち上げて、農と食の関係者、ステークホルダーが一堂に会して議論し、生産者と市民をつなぐ事業を行うことになった。三重県志摩市と立命館大学、三重大学の三者で連携協定を結んでおり、志摩市でキンコ芋など6次産業化の調査を行った。志摩市では学生を引率してメロン農家や漁師、観光施設でのインターンシップを行った。こうして、6次産業化の研究と地域連携事業が「車の両輪」のように進展し、そのなかで学生・院生が育ったことは重要だった。

前に出た川辺亮氏とは、北海道のアグリビジネス・リーダー養成塾、福井県の里山里海料理アカデミーと一緒に仕事をすることになった。アグリビジネス論に引き付けていえば、6次産業化は地域密着型のアグリビジネスである。これについては、R-GIRO研究拠点立ち上げに先立つシンポジウムでの川辺紘一氏（農都共生総合研究所会長・北海道大学客員教授）の講演「地域複合アグリビジネスと6次産業化」から大きな示唆を得た（2012年3月）。こうした一連の取り組みのなかで、6次産業化に関するテキストを作る企画が生まれ、『6次産業化研究入門—食と農に架ける橋』の出版に結実していった（2021年3月、高学出版から刊行予定）。

結びに代えて

農と食をめぐる私の旅は、カナダ・サスカチュワンから高島町屋代村塾や草津、守山、志摩へと続いてきた。この旅は終着点が見えるどころか、行先が広がり拡散する一方であり、すぐには収束しそうもない。まとめということもできないが、結びに代えていくつか感想を述べることにする。

第一に、カナダ・サスカチュワン州の穀物農家まで行った最大の理由は、私たちのフードシステムの突端がそこまで伸びているからである。穀物輸入国である日本の食料供給は、輸出国の生産と集荷、加工、物流、輸出のネットワークに依存している。これは当たり前のことだが、それでは私たちは食料輸出国側の生産や流通事情をどこまで把握しているだろうか。フードシステムの突端が世界中に伸びているからには、農業・食料問題の研究はグローバルな視野をもたなければならないし、輸出国の農業生産者やアグリビジネスを含めて基礎資料や情報の収集を怠ってはいけないうと思う。これは食料自給率（カロリーベース）が37%まで低下した国の農業問題・食料問題研究者に課せられた「社

会的使命」である。

第二に、農業問題の研究者が農業部門だけを見て議論できる時代は過去のものとなった。農業はそれだけで自立しているのではなく、農業関連産業つまりアグリビジネスとの関係性（もっと言えば支配関係）のなかで動いている。アグリビジネスの活動範囲は農業資材、農業生産、加工、流通、外食、貿易などにわたっている。その中には世界的規模で活動する巨大企業、多国籍企業から、地域に密着した小規模・零細な企業まで質の異なる企業群を含んでいる。こうした内実をもつアグリビジネスを研究する方法論を構築するとともに、全体像を把握できるデータベースの整備が必要である。そこでは全国ベースの産業連関表分析にとどまらず、部門別・業界別の分析や個別企業の分析との接合が課題になる。

第三に、高島町屋代村塾が掲げる「都市と農村の共生」の理念はますます重要になっている。農業、農村の現実が厳しいことは変わりがないが、そこに一筋の光明を見出すとすれば、若い世代で農業に取り組む人、新規に参入しようとする人が増えていることである。その背景には経済社会の変化（高度経済成長、バブル経済からゼロ成長へ）があるが、同時に屋代村塾・農家体験合宿のような交流活動が全国各地で取り組まれてきたことの成果でもあると思う。こうした前進的なモメントをいかに育てて伸ばしていくかが肝要である。

最後に言いたいのは、「アクター自身に従うこと」である（プリュノ・ラトゥール『社会的なものを組み直すーアクターネットワーク理論入門ー』 p.27）。この数年間大学院生と専門分野を超えて学ぶ「学際ゼミ」を続けている。そこで読んだラトゥールは、イノベーションが次々に起こる状況、グループの境界が不確定な状況、事物の範囲が揺れ動いている状況では、既成の方法では「もはやアクターによる新たなつながりをたどればはしない」と述べる。「起伏のある土地を初めて探索すること」になぞらえて、「ANTが好むのは、小道を徒歩でゆっくりと進み、移動にかかるすべての費用を自分の財布から支払って旅することである」と書いている（同書、p.46）。個人的には「晴耕雨読」の生活を理想としているので、晴れた日には起伏のある小道を徒歩で探索し、雨の日は書物を紐解きながら、「アクターによる新たなつながり」をたどり続けたいと願っている。

（まつばら とよひこ 立命館大学食マネジメント学部・教授）

